

伯耆大山・弥山西稜

【報告者】A坂・A屋・I藤

【日時】2019年3月17日(日)

【天候】風雪及び濃霧 風速15~19m/s

【参加者】A坂(CL) A屋(SL) I藤

《コースタイム》

ゲストハウス寿庵 5:30 出発—大神山神社 6:00—元谷・下宝珠分岐 6:10—元谷堰堤右岸分岐 6:30—元谷小屋 6:45—西稜取り付き 7:50—大山頂上 12:00—大山頂上避難小屋 12:30—夏山登山道八合目 12:45—六合目避難小屋 13:00—南光河原駐車場 13:46

《報告》

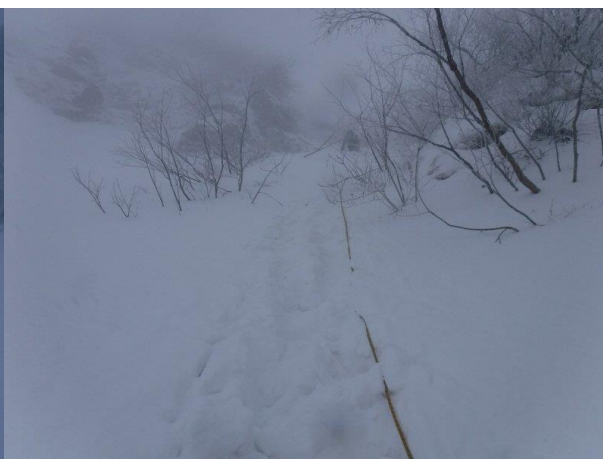
1 気象条件およびルート選択 予報では登山当日の早朝から雪が降り続けるとのことで、雪の中での撤収・準備の面倒さを考慮し、駐車場泊の予定を大山ゲストハウス寿庵(1泊3,500円/人)に変更した。暖かい場所での食事、就寝、登山準備ができ、登山口にも近いため、登山の前泊として大変便利だった。北アルプス山小屋でも働いていた気さくで山好きなオーナーが営むこの宿は、登山者のニーズにマッチしており、大山の登山環境のためにも存続して欲しく、機会あればまた利用したい。

※寿庵 URL: <http://www.daisen-guesthouse-juan.com/>

事前準備の段階では、例年より雪の少ない残雪期大山における落石や底雪崩のリスクを警戒していた。しかし、ちょうど寒の戻りにあたり、当日は厳冬期の様相となった。そのため、むしろ新雪雪崩や悪天候による行動不能などを懸念しつつ、現地でルートを最終決定することにした。取り付きに向かう途中、元谷小屋に立ち寄り前日に弥山尾根を登攀したガイドらに伺うと、前日の弥山尾根は、降り続く新雪が深く、ラッセルが厳しかったそうで、今日の行程は中止するとのこと。この情報を踏まえ、弥山東稜から若干グレードを落として、弥山西稜をルートとして選択した。



【ホワイトアウトで取付き自体不明瞭】



【1ピッチ目取付き直後】

2 コンディション 基本的に、弥山西稜は冬季バリエーションの入門ルートである。最小限の冬山装備で、アックス1本とシュタイク・アイゼンおよびザイル等があれば誰でも登攀可能である。しかし、それもこれも天候・コンディションが良ければ、という話であって、結果的に今回は、条件の良かった

場合の弥山東稜に比して、総じて厳しい登攀となった。

まず、取り付きまでのルート自体、ホワイトアウトの中で明確には視認できない。そのため、小屋上部の樹林帯との相対的位置から、取付きの見当をつけながら進むほかない。ここでルートを誤り、別山の「幻のカンテ」ルートに取り付いたピナクル・パーティも過去にあるとの由。一瞬明瞭になった際に西稜・東稜の取付き部を確認し、西稜に向かった。

【斜度の緩んだ上部。視界不良】

取付き近辺の新雪 40~50 cmほどで、その下には固く氷化した層がある。そこにシュタイク・アイゼンの前爪が刺されれば登高に支障はない。ただし、氷化した層の状態は場所によりまちまちで、スカスカで崩れやすかったり、逆にカチンコチンに凍って前爪が刺さりにくかったりと、付近の形状や灌木の生え方によって変化する。とくに下部は部分的に凍結・岩でアイゼンが効きにくい場所があり、わずかに迂回して進む箇所もあった（逆にサラサラの深い新雪をラッセルする箇所もあった）。また、上部の低い灌木帯は、樹氷の集合体に雪が付いたような雪面であるため、脆く陥没して歩きにくいところも散見された。



天気予報によれば、風速は頂上部で西南風 19m/s の荒天であった。もっとも、山体に守られた北壁側は比較的穏やかで、ときおり吹き付ける風雪を耐えれば、バランスを崩すまでの強風ではなかった。

3 登攀時の注意点 今回の気象条件の場合、終始ガスが濃く、10m程度の視界だったため、ルートの様子が判然としなかった。いままで西稜では経験したことのない急峻な灌木帯も通った（一方で亀裂の入った雪面など、雪崩が発生しそうな兆候は見える範囲ではなかった）。基本的には尾根通しであるが、視界不良が原因でやや困難なルートを選択することになる可能性もあり、少なくともリードはダブルアックスを装備した方が良いと思われる。

また、今回は新人がおらず、かつ荒天予報であったため、スピードを重視し、終始コンティニュアンスで、ピッチ分割も2ピッチのみとした。この場合、ランニングは7-8箇所とったが、心配であればもう少しランナーを携行した方が良いかもしれない。ランナー切れにならなければ（あと3本あれば）、そのまま1ピッチで上まで抜けるイメージであった（もっとも、ピッチ分割・ランナー数については人・条件次第で様々であるため、参考程度とされたい）。後半は傾斜が大分緩くなり、歩いて登る形になるので、ほとんど確保の必要はなくなるが、万が一の突風を考慮し、頂上小屋までコンティニュアンスで行動した。

なお、今回の気象条件においては、ランニング・ビレイが凍りつくケースが多くあり、複雑な形状のヒッチを用いると、スリングやカラビナの回収が面倒であった。携行時も、ある程度解きやすい形にしておかないと、いざ使用するとき凍りつき、冬季用グローブでは解くのに時間がかかる場合がある。

また、今回のように頂上稜線での暴風が予想される場合には、終盤の斜度が落ちつくあたりで、強風に備えてバラクラバやゴーグル等を装備し、GPSで方角を確認した方が良い。今回は稜線を視認できたが、ホワイトアウトすると稜線の位置がわからず、方角も定かではなくなり、滑落したり、雪庇を踏み抜く可能性が高まる。実際、当日の頂上小屋からの下山途中でホワイトアウトの中で滑落し、翌日救助されたパーティもいた。

4 雷とともに 最後に、今回は落雷の可能性もありとの予報であった。風雪のみに着目すれば、今回は山行中止とするほどの悪天ではなかった。しかし、落雷については慎重に判断する必要がある。結果的に2回ほど、山頂付近で近距離の落雷に遭遇した。自分と同じ目線で雷が光る様は、ある意味スペクタクルであるが、早く退散するに越したことはない。ここでもゴーグルが実に役立ったが、しかし、落雷の可能性が高い場合にはそもそも登攀しないという選択肢も視野に入れた方がよく、落雷の可能性の程度を踏まえつつ、その他の気象条件やパーティの速度なども勘案して、リスクを総合的に判断する必要が出てくるだろう。

《ルート図》

